

紹介

E・W・モンター著

中村賢二郎・砂原教男訳

『カルヴァン時代の

ジュネーヴ』

介
紹
めには、それが必要なことはいうまでもな

い。カルヴァン研究では、国家と教会の關係が一つの大きな問題となっており、これの正しい理解のためには、ジュネーヴに関する研究は特に不可欠である。このような現状の中で、カルヴァン時代のジュネーヴ史について全般的知識を与えてくれる本書が訳された意義は大きいといわねばならない。

著者は、カルヴァン時代のジュネーヴの歴史的重要性として、「キリスト教界の他の地域の熱心なプロテスタントにとつての模範」となった点と、「一六世紀に独立し、それを維持しつづけたヨーロッパでただ一つの都市」であった点をあげる。この「ジュネーヴの成功」が何に起因するのかわ、第一部において当時のジュネーヴ史を概観し、第二部でジュネーヴの諸制度と亡命者集団を述べ、第三部でカルヴァン死後のカルヴィニズムの動きとカルヴァンの遺産をみることによって、探ろうとした。著者は本書全体を通じて、二つの大きな理由をあげている。

まず第一は、地理的理由。ジュネーヴは「組織をもつプロテスタンティズムの南西部」に位置する辺境地であった。このため、

ハプスブルク・ローア戦争に巻き込まれることなく、またカルヴァンがいたことと相まって多くの亡命者が訪れた（彼らの役割は第二の理由で触れる）。さらに重要なのは、ジュネーヴが、カルヴァンの居住時期、新教都市「ベルン」によって油断なく守られていた衛星国であったことである。ジュネーヴは司教都市で旧教のサヴォワ公国の属領であったのであるが、一五三六年、カルヴァンが来る直前、ベルンの援助を受けて独立を確かなものとし、同時に宗教改革を行なった。しかし、カルヴァンの死後、再びジュネーヴを奪いかえそうとするサヴォワの脅威に曝されることとなる。「カルヴァンの生存中だけ、ジュネーヴは政治的・宗教的緩衝地帯にとり囲まれていた」わけである。

第二は、カルヴァンの存在。著者はこの理由を間接的に描こうとする。カルヴァンの貢献自体間接的なものであった。彼の影響力は「本来政治的なものではなかった」。彼は「教理問答書と説教と教会訓練」によって、「古くからの精神的指導者を根こそぎにしまったばかりの、強情で革命的でさえある人びとに、キリスト教的な訓練

を教えこんだ」。この訓練が地理的理由と相まって多くの亡命者をひきつけ、その彼らがジュネーヴばかりでなくヨーロッパ・プロテスタントにとっても大きな役割を果たすことになる。著者の計算によれば、ジュネーヴは「一五五〇年と一五六二年の間に少なくとも七〇〇〇人の移住者を受け入れた」。市政府の中心をなす小議会は亡命者には閉ざされており、政治的影響力は殆どなかったが、聖職者、教授、印刷業者など知的職業の代表的なものは彼らがほぼ独占していた。ジュネーヴの教会は彼らによって担われ、また「神聖な都市」としてのジュネーヴの名を広めたのも彼らであった。さらに、独立を守るためにも貢献した。彼らはカルヴァン死後徐々に生粋のジュネーヴ人と同化し、カルヴァン時代の遺産を後々までも伝えることとなる。このように、カルヴァンのジュネーヴへの、さらには全ヨーロッパへの影響という問題を亡命者集団を媒介としてとらえ、彼らの働きを高く評価していることが、本書全体を通じての大きな特徴となっている。

以上簡単に内容を紹介したが、カルヴァン時代のジュネーヴ全般にわたっての概説

書としての性質上、個々のテーマについては、たとえばカルヴァン派とペラン派の対立点及びそれと国家と教会の関係など、十分に展開されていないところもみうけられるが、カルヴァンを特に専門とはしない紹介者などにとっては益するところ多い。

この訳書の出版を機会に、我国においても、カルヴァンばかりでなく、ジュネーヴ史についても研究がすすめられることを願う。

(四六判 三五二頁 一九七八年二月 ヨル
ダン社 二、四〇〇円)
(中谷博幸 京都大学大学院生)

小池 滋著

『ロンドン』

——ほんの百年前の物語——

ほんの百年前にはロンドンは単にイギリスの首都であるにとどまらず、世界の経済・政治・文化の中心でもあった。また膨張が極度に急速であった反面、商業資本が支配し続けた点で、国内の諸都市とも相違していた。本書はこのユニークな都市、ロンドンのいわば案内書である。

各章の要約は以下の通りである。序章——大きなおできの町——では、ロンドンの急激な膨張が当時の人びとに異常現象と映った例として、コベットの「おできの親玉」(The Yew) という語が引用され、本論への導入となっている。第一章——逃れの町——では、ロンドンが名声を求める各国の音楽家・亡命中の作家や政治家・農村で食いつめた貧困者・世間の目を避ける者など、国の内外の逃亡者によってふくれあがった「逃れの町」の側面を持ったことが指摘されている。第二章——コヴェント・ガーデン盛衰記——では、ロンドン・シテイ膨張によって都市に取り込まれ、ロンドンの住民の生活に不可欠の機能を果たすに至ったコヴェント・ガーデンの実態が描かれている。すなわちコヴェント・ガーデン王立劇場・ロンドン中央警察法廷・青物市場、そして「ハمام」あるいは「バーニョ」と呼ばれるホテルが建ち並び、人びとの精神や心の欲求・食欲・性欲を満たしていたのである。第三章——スコットランド・ヤード交響曲——では、犯罪の蔓延に対処すべき警察制度の巨大化・近代化過程が、スコットランド・ヤードの歴史を中心に紹介